液状化する地域研究：移動のなかの北東アジア

テッサ・モーリス-スズキ

本報告では、金剛山の歴史の事例を、北東アジアの地域的視座を探究するための出発点としている。特定の場所を選び、その場所とそれをとりまく世界とを結びつける経路のネットワークの変化を探究することによって、その地域全体に関する興味深い事がらや、その地域自体が歴史的にどのように変化してきたかを知ることができるだろう。

本報告で提起したいのは、既存の地域研究において所与の前提であった「地域」という概念自体を再考することである。「地域」を、旅行や通商やコミュニケーションといった人間の活動によってのみ存在するようになるものとしてとらえるならば、ある「地域」というのは、地理的な基層に埋め込まれた固定的なものというよりも、絶え間なく形を変える噴水のようなものである。この「液状化する地域研究(Liquid Area Studies)」という視点からは、以下のことが導き出される。第一に、「地域」は、多様な形態をとりうるということ。第二に、「地域」は、重なりあう場合があること。第三に「地域」は、永遠に不変のものではありえないこと。そして、液状化する地域研究というアプローチは、「流れ(flow)」と「渦」という、人間の相互作用に関わる二つの要素に注目する。

歴史が示しているのは、人びとが地域をつくるということである。すなわち地域は、大きな政治的戦略をとおして、また、国境を越えて旅や交流をする普通の人びとによって織り込まれる無数の小さなつながりをとおして、つくられるのである。北東アジアだけではなくあらゆる場所で、地域を生み出す流れや渦は、暴力的なものであれ、平和的なものであれ、人びとの力によってつくりだされ、支えられている。金剛山のようなひとつの渦の将来は、変わり続けてきたその千年の歴史とともに、その地域の人びとの手のなかにあり、このような小さないくつもの渦の行方が、将来におけるこの地域全体の統合または解体に影響を及ぼす力を持っているのである。